

令和4年8月13日

# 南の風アカツキジャパン女子日本代表特集号 I

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

2022FIBA女子ワールドカップは、9月22日(木)～10月1日(土)にオーストラリアのシドニーで開催されます。最終的に、10日間で8ゲームという過密スケジュールになります。

その女子ワールドカップに向けての、最後の国際強化試合となるラトビア戦が、8月11日と12日にゼビオアリーナ仙台で行われました。私も観戦に行きました。この特集では、アカツキジャパン女子代表の戦いぶりや、恩塚HCの考え方を中心に紹介します。

## 《ラトビア戦を前に恩塚HCのコメント》

日本でゲームができる今シーズン最後の機会として、私たちが目指すバスケットスタイルや表現する思いを、仙台でしっかり発揮できるように今準備しています。

選手選考もありますが、FIBA女子ワールドカップに向けた大事な強化や表現の機会として、最善を尽くしたいと思っています。

3Pシュートの精度を高めるため、チーム練習の中でも個別にもゲームにより近い形で打つシューティングや、ハンドリングやフットワークにより負荷のかかるシューティングを取り入れてきました。5月頃は、30%前後だった確率が今は40%を超えており、全体的なシューティングデータも6～70%を超え、確実にステップアップしています。

オフェンスでは、前回のトルコ戦までは、『**原則を落とし込み**』そこをベースにそれぞれの強みを発揮したり、相手に対応しにくいようなプレーを選択したりするように注力してきました。

次にプレーの『**即興力**』を高め、その場に応じてコーチからの指示でも選手自身でも判断して、アジャストしてできることを7月の合宿で実施しました。男子大学生との練習試合でも、適応力やアジリティも高まってきていると感じています。

今はさらにその上を行き、戦術的にいろんな負荷をかけて、カオスのような状態があえて起こるにしています。その中でも選手が『**最適解**』のチャンスを見つけ、周りの味方は瞬時に『シンクロ』して動き、チャンスを作り、あるいはチャンスを作り直し、攻防の速さを鍛えています。

ディフェンスでは、サイズのある海外の選手に対し、足を使ったアグレッシブなプレッシャーディフェンスをメインに考えています。プレッシャーをかけることによって、相手のミスを誘いボールをステールし早い展開に持ち込み、一番簡単に打てるレイアップシュートを決めることを理想としています。

そのために、メンバー全員でタイムシェアプレッシャーをかけ続け、誰が出てもパフォーマンスが落ちないように取り組み、相手チームの体力を削り、我々は後半までスタミナを維持して勝負を決める戦略を目指しています。

恩塚HCの言う「原則」とは、東京五輪のときにトム・ホーバスHCが戦術とした、フォーメーション(ナンバープレー、100以上あったと言われている)に替えて、チームの共通認識としてオフェンスの『原則』的切り口のことだそうです。3～4つあるそうです。

そしてそれに対応されたときに、カウンタープレーを次から次へと展開していく戦略です。選手の判断力を高めて、その判断力にチームがシンクロできるようにしていくのです。次号にします。